

くじら日記

太地町立博物館から



「イルカの飼育員と看護師、その両立が自分には合っている」。自身の動物との向き合い方をこう語るのは埼玉県坂戸市出身の宮崎葉月さん（28）。飼育員としてイルカを世話し、愛玩動物看護師としての経験を生かしイルカを診るという、二役をこなしています。

愛玩動物看護師は、令和4年に施行された愛玩動物看護師法に基づく国家資格で、動物の看護や診療の補助など、獣医師のサポートを担う専門職です。

宮崎さんがくじらの博物館の飼育員として最初に加わったのは平成29年。当時からイルカの看護師を目指していたわけではなかったといいます。「心境の変化が起った」のは、宮崎さんが初めて飼育を担当した雄のカマイルカ「しなと」の存在でした。ある日、しなとに餌の魚を

飼育員の思い③



宮崎葉月さんとカマイルカのしなと

やると、その食べ方に違和感を覚えましたが、経験が浅かった宮崎さんは「コミュニケーションがうまくとれなかったのかも」と、危機感をそれほどもたなかったそうです。ところが数日後、しなとは食欲が落ち、餌を全く食べなくな

りました。

駆けつけた医療班は、しなとから血液の採取と検査をし、宮崎さんに薬を渡しました。しなとに投与すると、次第に回復に向かったのです。ただ、一連の出来事を宮崎さんは「自分が世話をする動物

なのに、何の検査なのか、何の病気なのか、何の薬なのか、しなとがどのような状態だったのかも、一切わからなかった」と、当時の未熟だった自分を振り返りました。

その「悔しさ」は、それまでの鯨類の飼育員としての向き合い方にとどまらない「疑問」や「興味」へと次第に形を変えることになりました。

令和2年から、約4年間、

宮崎さんはくじらの博物館を離れ、犬猫などを診る動物病院に勤めました。検査の手法や検査結果の読み方、薬の種類など、獣医療の基礎を学ぶためです。

苦労したのは、水族館と動物病院とで、動物との関わり方が異なる点でした。水族館では、診療の対象となる動物と長い時間接することができ、一方、動物病院では、診療中の一時しかありません。つまり、餌を食べている様子や日常の行動を知ることができ

ないのです。

宮崎さんが意識したのは、診療の手掛かりとなる情報を、飼い主から聞き出す「問診」でした。「飼い主から看護師へ、看護師から獣医師へ。コミュニケーション次第で、診療がもっと良くなる」と考えたのです。同時に「水族館で、この経験を生かすことができるのではないか」と期待が膨らみました。

こうして動物看護師の資格をとり、経験を積んだ宮崎さんは、くじらの博物館に戻ってきました。担当動物は、しなとです。「点と点がつながったよう」。大好きな動物を、前よりも深く知ることができる」と言い、さらに「動物、飼育員、獣医師、その架け橋となって、誰もが動物に寄り添えるようにしたい。それが自分の役割」と言葉を強めました。

（太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹）

動物看護師の経験生かして